平成三十（二〇一八）年度
ニューヨーク補習授業校

第二十八回
作文コンクール
入選作品集

協賛　パナソニックノースアメリカ様

巻頭言に代えて

作文コンクール　最優秀作品解説

ニューヨーク補習授業校
校長　片山　隆

核兵器の怖さを知って

猿見田　美星（中等部三年）

太平洋戦争についての歴史的な見解は、日本とアメリカでは異なるが、母親から日本人として知っておく必要があることを伝えられる。

実際に広島へ行き、その事実を目の当たりにした時の想いが素直に表現されている。原爆の被害国としてではなく、世界にこのような惨劇を二度と起こしてはならないという強い決意が母親の想いと共に伝わってくる。

アイデンティティー

那須　咲代（中等部三年）

自分探しの旅という言葉を耳にするが、まさに自分を知る原点ともいえる旅がここにある。

環境や人との出会いによって、これまで自分の中にあった見方や考え方が変容し、本当の自分を見つけ出した思いが力強く伝わってくる。最後の一文にその決意が込められている。

優しさの中で

ウォーカー　美咲（中等部一年）

体験入学を通して「ゆずる」という行為から日本人の温かさを知った思い出深いストーリーが展開していく。

一見、ありふれた光景なのだが、作者の視点が、細やかな人としての配慮や心遣いとして表現されている。きっと、自分の生き方にもつながっていくものと期待する。

グレープフルーツ

マ　笑里（初等部六年）

家族は一番身近な存在だけに、優しさや思いやりを、当たり前だと思ってしまうことがよくある。

自分の不注意で起こしたことがきっかけとなり、会食していた家族のみんなの優しさに包まれていく自分。その心情を、実に素直で飾らない文章で表現されており、読者の心の中に温かく入ってくる。

ピンクの手帳

イスラス　華（初等部六年）

生れる前の遠い昔の話が、自分の身近にいる人とつながっていた瞬間。他人ごとではなく、我がこととして入ってくる。

おばあさん、おじいさんの話、そして現地校での授業、どれも事実として受け止めながら、戦争という悲劇を自分の言葉で表現している胸が打たれる作品である。

家族みんなが頑張った時間

高橋　健（初等部五年）

日本にいるおじいさんのために、両親と自分がそれぞれにできることを行い、成長している姿が見えてくる。

自分の寂しさよりも、おじいさんを助けるために帰ったお父さんを思い、頑張る作者の気持ちと親子の絆が文章に表れている。

友達、家族、戦争と平和

槇原　尚紀（初等部五年）

友達の父親のことを知り、自分の考えの甘さや弱さに気づき、乗り越えて行こうとする強さが伝わってくる。

友達の父親を奪った戦争を憎みながら、離れていても互いの友情を忘れず、前向きに進もうとする作者の想いが心に響く。

かめを助けるという事

クラーク　将人（初等部四年）

一匹のニシキガメを見つけたことから、命の在り方について考えさせられた作品である。

目を怪我しているカメを見つけ、病院に連れて行ったのだが、安楽死という形でしかカメを助けられなかった。その複雑な思いが、読んでいる私たちの胸を熱くする。

のこさず食べよう

酒巻　祐（初等部三年）

アメリカのスクールランチを見て、食べ物の大切さや有難さを素直に表現した文章である。

たくさんの食べ残しや、捨てられている食べ物を見て、「もったいない」という日本的な考え方を伝えたい気持ちが伝わってくる。

リスとのたたかい

板倉　朱弥（初等部三年）

トマトを育てる様子や気持ちが、三年生らしい表現で書かれている秀作である。

苗から大切に育て、やっとできた実をリスに食べられ、何とかしたい気持ちが「たたかい」という言葉によく表れている。

一年間のアメリカ生活をふりかえって

市川　真椰（初等部三年）

昨年アメリカに来たときの不安から、これまでの自分の成長を見つめている。

友達や先生のおかげで、言葉や学習の違いを乗り越えることができた様子が、しみじみと伝わってくる。

どこかいきのバス

今福　志門（初等部二年）

こんなにも本に感情移入した作文は読んだことがない。発想の豊かさに圧倒された。

主人公と自分とを比較しながら、思いを書くだけでなく、アメリカと日本をつなぐバスづくりへと飛躍する作者の夢の実現が楽しみである。

はじめてはがぬけた

槙　実乃里（初等部一年）

一年生らしい何ともほのぼのした作品である。

誰もが経験していることだが、初めて抜けるという期待が、宝箱と同化して読める。また、抜けるまでの思いや、次の歯が抜けることへの期待が素直に表現され、かわいらしくて仕方ない。